

幽閉者たちの町—交易都市アルトナの成立と発展

吉 田 量 彦

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第8号 抜刷
2023年（令和5年）3月20日

幽閉者たちの町—交易都市アルトナの成立と発展

吉 田 量 彦

City of the Condemned: On the Founding and Development of Altona

YOSHIDA, Kazuhiko

Abstract

Altona, elevated to the status of a trading city by a Danish king in 1664, was an independent city adjacent to the German metropolis Hamburg until April 1, 1937, when the so-called Great Hamburg Act (Groß-Hamburg-Gesetz) made it a district of Hamburg.

In this essay, the author attempts to elucidate the founding and development of Altona in the context of modern northern European-Scandinavian history, and in comparison with the neighboring city Hamburg, which had always opposed “Danes” and Denmark since its formation in the 8th century.

Approximately half a century before Altona was elevated to the status of a city, the Danes had founded another city on the Elbe below Hamburg: Glückstadt (1616). Originally, the founding of Glückstadt seemed to be an experimental proto-project of Altona, but considering the traces of Jewish immigrants from the Iberian Peninsula (the Sephardim), it appears that the opposite is actually the case. The Danes came to learn about the economic policy that was already being pursued in Altona by the counts of Schauenburg, whose county, including Altona, was not inherited until 1640 by the then Danish king. In the conclusion, the author summarizes the consequences of the Danish migration policy in Altona in the second half of the 17th century, which failed to meet the expectations of the Danes.

Keywords: area study, Altona, Hamburg, Denmark, Jews, Sephardim

目 次

はじめに—アルトナの幽閉者たち

1. ハンブルク史の中のデンマーク、デンマーク史の中のハンブルク
2. 交易拠点の新設実験—デンマークとグリュックシュタット
3. グリュックシュタットとアルトナ開発前史—ユダヤ教徒たちの動向を軸に
4. 交易都市アルトナの成立—紋章から読み取れる思惑と、その想定外の帰結
おわりに

はじめに—アルトナの幽閉者たち

アルトナ Altona, というのがこれから取り上げる町の名前なのだが、日本では聞いてもピンと来ない人が大多数かもしれない。それも無理のない話で、そもそもそういう名前の町はもう存在しない。ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党 (Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei: NSDAP)、通称ナチスが政権を握っていた1937年4月1日、いわゆる「大ハンブルク法 Groß-Hamburg-Gesetz」の施行によって隣接するハンブルクに吸収合併されてしまったことで、都市 Stadt としてのアルトナは消滅した。¹⁾ 現在ではハンブルクに設けられた区 Stadtteil の1つとして、わずかにその名が残るばかりである。

エルベ川の北岸にかつて隣接していた2つの町、ハンブルクとアルトナは、来歴が全く異なっていた。まずハンブルクは、後述するように、近年の考古学的調査によれば8世紀にさかのぼる歴史をもち、²⁾ 中世以来ハンザ同盟の基幹都市として長い繁栄を続けて近代にいたった。今も正式名称はハンザ自由都市ハンブルク Freie Hansestadt Hamburg であり、郵便の宛名等で略記する場合も HH とつづる (同じハンザ同盟の系譜に連なる町は皆そうで、例えば近隣のブレーメンなども Freie Hansestadt Bremen / HB である)。

これに比べるとアルトナの歴史は短く、そして多分に人工的である。農村漁村が点在するばかりで目ぼしい交易拠点にめぐまれなかったこの地域一帯の歴史は、一般には1640年代、中世以来の封建領主の家系が絶え、デンマーク王が領主権を相続したことで大きく動き始めたこととされる。喉から手が出るほど外貨の欲しかった歴代のデンマーク王は、自領となったこの一帯にアルトナを含むいくつかの交易拠点を設置し、重商主義的な保護貿易政策による外貨獲得に利用しようとしたというのである。こうした理解は、後述するように細かい所での修正が必要だが、大筋では合っている。

これらの交易拠点には、ハンブルクをはじめとする近隣の先進交易地へのキャッチアップを図るべく、いわば王の肝いりで、有能な商人たちを呼び込むためのさまざまなてこ入れが施された。信教の自由が当時としては大幅に認められることになったのも、そうしたてこ入れの一環である。

アルトナは、さまざまな事情から、こうした政策が最も効果を発揮した町となった。具体的には、主に宗教上の理由から居住地や生業にさまざまな制限を設けられていた人たちが、とりわけユダヤ教徒たちが、ヨーロッパ各地からアルトナに押し寄せた。また、少し時代が下って18世紀を迎えると、当時異端者もしくは無神論者として神聖ローマ帝国域内で激しく迫害されていた知識人たちが、いわゆる自由思想家たち Freidenker も、こぞってアルトナへ逃げていくようになった。

20世紀の文学と哲学に大きな足跡を残したサルトル (Jean-Paul Sartre: 1905-1980) も、オリジナル作品としては生涯最後となった戯曲の舞台に、この町を選んでいる。³⁾ 日本でもアルトナとい

う地名に聞き覚えのある人が多少なりともいるとしたら、それは大方このサルトルの戯曲『アルトナの幽閉者 Les Séquestrés d'Altona』（1959）のおかげと思われる。^{4）}サルトルはアルトナが「大ハンブルク法」によって消滅する4年前の1933年、ナチス体制の成立から約半年後のベルリンで留学生活を始めているから、恐らくこのベルリン時代に、同じ北ドイツのアルトナという町についても何かしらの風聞を得ていたのだろう。さらに想像をたくましくするなら、例えばその風聞とは、そこからさらに1年前、1932年7月17日のアルトナで起きた「血の日曜日 blutiger Sonntag」事件にまつわるものだったかもしれない。^{5）}

ただし『アルトナの幽閉者』の舞台がアルトナに設定された理由は今ひとつはっきりしない。そもそも管見する限り、サルトルはドイツ留学時代もその後も、恐らく一度もアルトナを訪れていない。^{6）}また作品を注意深く読むと分かるのだが、少なくともこの作品を上梓した当時、サルトルのアルトナに対する土地勘はさきわめて怪しいものだった。^{7）}さらに言えば、どうしても舞台がアルトナでなければならない理由は、筋書き的にも特に見当たらない。鉄鋼・造船業で大儲けするドイツ人の成金一家がいても不自然ではない町という点では、プレーメンでもデュッセルドルフでも作劇上まったく支障はなかったはずである。^{8）}

にもかかわらず、サルトルはアルトナを選んでいる。そうである以上、そこにはたとえほんやりとしたものであっても、何らかの理由がなければならない。これも想像だが、恐らくサルトルは、アルトナが「幽閉者」と浅からぬ縁のある町であることを、いつかどこかで聞きかじって記憶していたのではないだろうか。

幽閉者と訳されてはいるが、『アルトナの幽閉者』の主人公は別に本人の意思に反して監禁されているわけではない。召集中に戦地で犯したある戦争犯罪の記憶に苛まれる彼は、復員してからも戦後ドイツ社会の日常に溶け込めず、いつまで経っても実家の屋敷の屋根裏部屋から出てこれない。彼の置かれた現状は幽閉というよりもむしろ「引きこもり」であり、あえて幽閉という言葉を使い続けるなら「自発的幽閉」とでも呼ぶしかない状態なのである（否応なく生まれてしまったトラウマを原因とする引きこもりなので、「自発的」という形容は厳密にはふさわしくないかもしれないが）。^{9）}

歴史的・伝統的に、アルトナはまさにこうした自発的幽閉者にあふれた町であった。先ほど述べたように、18世紀全般を通じ、そこには迫害を逃れた学者や思想家たちが神聖ローマ帝国内各地から集まり、ただし集まったからといって特に徒党を組んで教会勢力に対する思想闘争を繰り広げるわけにもいかず、めいめいが町のあちこちに隠れ住むことを余儀なくされていたのである。なぜ、そしてどのように、こうした奇妙な町が生まれたのだろうか。

本稿は、かつて独立した交易都市であったアルトナの成立と発展の経緯を、隣接するハンブルクと随時対比しながら、初期近代の北ドイツ史・北欧史の大きな流れの中で説明する試みである。これまで述べてきたことから察せられるかもしれないが、管見する限り、いわゆる地域研究 area study の邦語文献でアルトナが中心的考察対象として取り上げられたことはこれまで一度もなく、また海外の研究文献まで探索の手を広げても、こうした試みに捧げられた先行研究は容易に見つからない。そこでアルトナが主題化されるのは、当該地域一帯の貴重ではあるがマイクロで断片的な史料の掘り起こしに終始する実証的地域史・郷土史研究においてか、逆に当該地域の情報を通史的に網羅してはいるものの地域横断的な目配りに乏しい概説的研究においてか、ほぼこのどちらかと言っても過言ではない。^{10）}

本稿では、まずハンブルクとデン人・デンマークとの建設以来の因縁について概論的にまとめてから（第1節）、デンマーク政府がアルトナ開発以前に建設を試みた交易拠点として、エルベ

川北岸のさらに下流部に位置するグリュックシュタットの例を紹介し（第2節）、アルトナの場合と比較する。グリュックシュタットの建設とアルトナの都市認定および開発の間には約半世紀の開きがあるため、この2つのプロジェクトの関係は前者が後者のプロトタイプのように理解されてきたが、デンマークが間違いなく有力な誘因対象の1つと見なしていたイペリア半島系ユダヤ教徒（セファルディム）の動向に着目すると、実はむしろ反対の流れが見えてくる（第3節）。そして最後に、アルトナの都市認定およびその後の宗教寛容政策を検証し、それがデンマーク側の思惑とは微妙にずれた結果に帰着したことを明らかにする（第4節）。

1. ハンブルク史の中のデンマーク、デンマーク史の中のハンブルク

アルスター川とビレ川がエルベ川北岸に相次いで流れ込む、その3河川の合流地付近に人間が集落を作って暮らし始めたことが、後にハンブルクという名で呼ばれる町の始まりとされている。¹¹⁾ 「はじめに」でも述べたように、21世紀になって行われた発掘調査の結果、この地に集落を保護するための砦Burgが建築された時期は、従来考えられていたよりはるかに早く、8世紀に遡ることが明らかにされた。このハンマブルクHammaburg、つまり後のハンブルクが初めて史料に登場するのは、これよりかなり下った832年、とある伝道師がキリスト教布教のために訪れた時のことである。¹²⁾

この地に早くから防衛拠点が築かれたのは、カロリング朝フランク王国の勢力圏の周縁部に位置していて、現地民の武装蜂起が後を絶たなかったことに加え、¹³⁾ 外部からの侵入者に備える必要もあったからである。外部からの侵入者とは、ちょうど同じ9世紀に入って活動が活発化し始めた、いわゆるヴァイキングWikingerのことを指す。高度な造船・航海技術を駆使し、ユトランド半島やスカンディナヴィア半島から水路を伝ってやって来る彼らは、一時はヨーロッパ各地で、交易相手という側面もないことはないものの、むしろ出方が読めない侵入者・略奪者として強く恐れられていた。¹⁴⁾ ハンマブルクとその近隣諸地域も、845年の夏、一度ヴァイキングの侵入による壊滅的な被害を受けている。¹⁵⁾

ハンマブルクを襲ったヴァイキングがどこから来たどのような人々だったのか、正確なことは無論分からないが、比較的近場のユトランド半島から来たデーン人たちdie Dänenの集団だった可能性がやや高い。¹⁶⁾ いずれにせよハンブルクという町は、いわばその起源においてデンマークという仮想敵を抱えており、その南下圧力に抗しながら町としての発展を続けてきたと言える。デーン人を人種的・民族的に正確に定義するのは不可能だしその必要もないが、言葉通りの意味にとるなら、デンマークDänemarkとはデーン人たちが辺境につくった国Markに他ならないからである。

デンマーク対ハンブルクというこの構図は、時代を大きく飛ばして初期近代に目を移してみても、意外と変わっていない。

17世紀、三十年戦争とその周辺で起きたいくつかの戦いの帰趨により、デンマークはスカンディナヴィア半島のほぼすべての領土を失い、1660年代にはユトランド半島とその周辺の島々のみからなる小国に転落した。それまでの国境を大きく後退させた結果、王都コペンハーゲンも国土の東端に近い、地政学的に非常に危うい位置に置かれることになった。¹⁷⁾

北欧で手痛い損失を受けたデンマークは、これを埋め合わせようとするかのように従来以上に南方への関心を強め、ハンブルクの富にも食指を伸ばし始めた。とはいえ、さすがに800年前のヴァイキングのように、突然やって来て略奪をはたらくようなことはしない。次節以降で詳しく見るように、17世紀を通じ、歴代のデンマーク王はハンブルクに影響力を行使するための、そし

場合によってはハンブルクの力を殺ぐための、さまざまな布石を打ち続けた。

デンマークがいよいよ本格的な軍事行動に出るのは、1680年代に入ってからのことである。¹⁸⁾ ハンブルク市政の数年来の内紛に乗じたデンマークは、紛争当事者の一方に加勢するという名目で派兵を試みる。1686年の8月から9月にかけて、ハンブルクを包囲したデンマーク軍との間に3週間に渡って断続的に砲撃戦が繰り返されたが、三十年戦争を期に堅固な城塞化を終えていた町を陥落させることはできず、またデンマーク王の勢力拡大を望まない神聖ローマ帝国側から次々に援軍が到着したため、やがてデンマーク軍は撤退を余儀なくされた。¹⁹⁾

ハンブルク旧市街の北には外アルスター湖 Außenalster が広がっていて戦線を構築できないため、この時北西方面から攻めてきたデンマーク軍は、攻撃を町の西半分に集中せざるをえなかった。ハンブルクの地図を詳しく見ていくと、現在でも新市街（三十年戦争時代の城壁跡の外側）の西部から北西部にかけて、この包囲戦にちなんだ地名が転々と残っている。個人的な思い出になるが、例えば筆者がハンブルクでの5年半にわたる留学期間の大部分を過ごした大学近くのアパートは、「塹壕 Laufgraben」という奇妙な名の付いた裏通りに面していた。新市街北西部のこの辺りには、かつて十字手裏剣に似た形の出丸が築かれていて、星形要塞 Sternschanze と呼ばれていたのだが（ちなみにこの地名も残っている）、この要塞を攻略するために侵攻してきたデンマーク軍が、この辺りにやたらと塹壕を掘ったのである。²⁰⁾

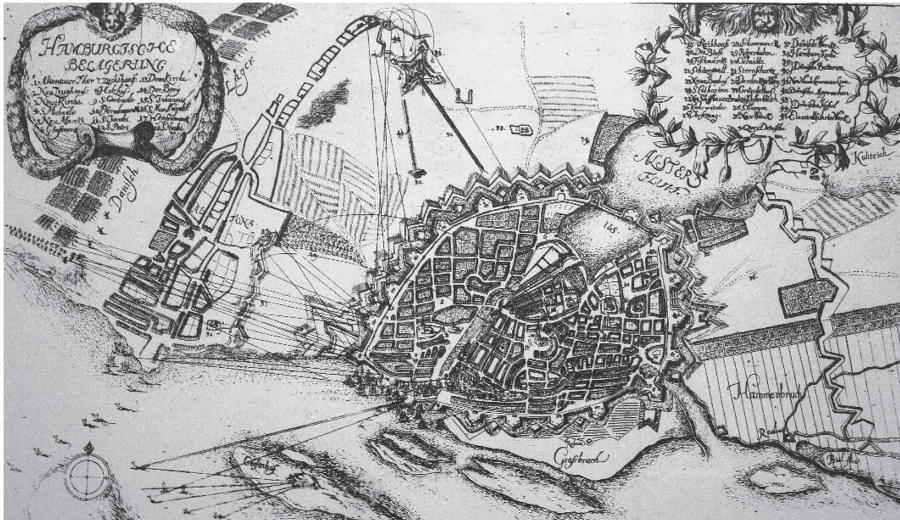


図1 1686年ハンブルク攻囲戦を描いた同時代の絵図。フリー画像。ドイツ語版ウィキペディア ([https://de.wikipedia.org/wiki/Belagerung_Hamburgs_\(1686\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Belagerung_Hamburgs_(1686)))より転載。アルトナ側にも砲撃に備えた防壁が町の東側に一時的に築かれているのが分かる。中央やや左上に見えるのが星型要塞)

2. 交易拠点の新設実験—デンマークとグリュックシュタット

前節でも軽くふれたように、17世紀全般を通じて、歴代のデンマーク王たちはただハンブルクに食指を伸ばすだけでなく、これに経済的に対抗するためのさまざまな布石を打っていた。以下

で述べるグリュックシュタットの建設や、アルトナの都市認定および開発も、そうした気の長い布石の一環として理解しなければならない。

太った獲物を好むのが古今東西の侵略者の常だから、最終的には手に入れたがっている町を経済的にやせ細らせようとするのは愚策というか、戦略的に矛盾しているようにも見える。しかしつけ狙っている当の町を安定的に勢力下に置けるかどうか自体がきわめて不確かな状況では、このような中途半端というか、どちらに転んでもそこそこ得をしそうな両面作戦こそが最も合理的だったようである。

グリュックシュタットとアルトナ、および両者の関係について本格的に語るには、まずその前に、17世紀におけるハンブルク周辺地域の封建領主たち、特に歴代のデンマーク王の動向について、少し複雑な話をしておく必要がある。

17世紀、デンマーク王国を支配していたのは、元々北ドイツに起源をもつオルデンプルク家 Oldenburg である。1448年に起きた王朝交代の結果、当時北ドイツのホルシュタイン地方一帯を領有していたこの一族がデンマーク王を兼ねることになり、その後1460年にはシュレースヴィヒ地方も領有することになる。²¹⁾ デンマーク語では飲み込んでしまって発音しない文字が多くなるため、この王朝をオルデンプルク朝ならぬオレンボー朝 Oldenburg という。

アルトナを含む、ハンブルクから見て西から北西に広がる地域も、大きく言えばホルシュタイン地方の一部である。ところがこの一帯には、17世紀前半まで、別の領主の家系がいた。つまり歴代のオレンボー朝の王たちが、封建領主間の仁義を表面的にせよ尊重するそぶりを示そうとするならば、直接手を出せない地域だった。この地域の領地名をピンネベルク伯領 Grafschaft Pinneberg といい、ここを17世紀前半まで領地（の一部）としていた家をシャウエンブルク伯家 Graf Schauenburg という。²²⁾ 領主の異なる、そして小領地であるがゆえにそれ自体は大した脅威にならないピンネベルク伯領の存在は、ハンブルクから見れば、デンマークという大勢力に対する一種の緩衝地帯として機能していたと思われる。

この緩衝地帯がなくなってしまうのが、17世紀前半のことである。三十年戦争が進行するなか、近隣領主の領土的野心にさらされて難しい領地経営を迫られていたシャウエンブルク伯家が、1640年に断絶したからである。領主の地位が空いたピンネベルク伯領は、その大部分を遠戚に当たるデンマーク王が相続したため、ここでアルトナは初めてデンマーク王の直接の支配下に入ることになり、そして隣のハンブルクもデンマーク王の野心に直接さらされることになる。²³⁾

既に三十年戦争の始まり（1618）に前後して、ハンブルクは神聖ローマ帝国法廷 Reichskammergericht の決議により、帝国自由都市 freie Reichsstadt の地位を保障されている。これによると、デンマーク王といえども神聖ローマ帝国域内では皇帝に所領安堵された封建諸侯（シュレースヴィヒ・ホルシュタイン公）の一人に過ぎないため、皇帝直属の帝国自由都市であるハンブルクとは対等に近い関係になるはずである。しかしオレンボー朝歴代の王はこの決議を承認せず、ハンブルクをあくまでホルシュタイン地方の一都市と見なし、17世紀全般にわたってホルシュタイン公＝デンマーク王に対する臣従 Huldigung を執拗に求め続けた。²⁴⁾

同じ1610年代、デンマークはハンブルクに対するこうした圧力外交の一環として、アルトナよりもさらに下流のエルベ川北岸に新たに都市を設け（1616）、ハンブルクが支配的であったエルベ川下流域の水上交易の利権に食い込もうとしていた（アルトナを使わなかったのは、上述したように、デンマーク王家がまだピンネベルク伯領を継承していなかったからである）。これが今日でもドイツ連邦共和国シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州の小都市として存続しているグリュックシュタット Glückstadt である。²⁵⁾ 筆者もハンブルクで暮らしていたころ一度だけ訪れたことがあ

るが、都市機能が集中していた広場から放射状の街路が幾何学的な正確さでのびていて、ほぼ何も無い土地に機械的に図面を引いてこしらえた町であったことがありありと実感された。

「幸運の町」グリュックシュタットが実際の所どれだけデンマーク側に幸運 Glück をもたらしたかは、²⁶⁾ 文献によって評価が分かれていて判断に窮する。1630年、デンマークはグリュックシュタット沖に軍艦を出し、ハンブルクの商船から強制的に通行税を徴収する一方、ハンブルクがエルベ川の航路整備等を名目に徴収していた船容別通行料 Tonnengeld の支払いを拒むようになったという。²⁷⁾ これが事実とすれば、デンマークはこれまでハンブルクがエルベ川交易で果たしてきた役割およびそこから得ていた利益を、そっくりそのままグリュックシュタットに奪わせる腹積もりだったと思われる。しかし繰り返すが、このような政策がハンブルクの経済に実際どの程度深刻な打撃を与えることになったかは、文献の記述が錯綜していて正確な判断を下しづらい。²⁸⁾

いずれにせよ、17世紀前半の北欧3国におけるデンマークの相対的地位低下と、これに伴うスウェーデンの台頭により、起死回生を狙ったデンマーク側のグリュックシュタットを介したエルベ川交易支配の試みも、この世紀の半ばにはどこか中途半端な形での停滞を余儀なくされたと思われる。前節でも述べたが、グリュックシュタットを「幸運の町」と名付けたクリスティアン4世(在位1588-1648)の治世の後半、デンマークは幸運に見舞われるどころか、敗戦に次ぐ敗戦により領土を削られ続けることになる。²⁹⁾ 入れ替わるように台頭してきたのが隣国のスウェーデンである。ハンブルクおよび神聖ローマ帝国との抗争に加えて、エルベ川南岸の交易拠点をスウェーデンにおさえられたデンマークは、三十年戦争末期にはグリュックシュタットにおける通行税徴収を断念せざるをえなくなったという。³⁰⁾ 以後デンマークのエルベ川交易政策の重点は、同じエルベ川北岸でもハンブルクよりかなり下流に築かれたグリュックシュタットから、1640年によく王領に編入された、ハンブルクに隣接する旧ピンネベルク伯領の中心都市(に、これからなるはずの)アルトナへ移ることになる。

3. グリュックシュタットとアルトナ開発前史—ユダヤ教徒たちの動向を軸に

グリュックシュタット創設に前後してデンマークが行った人集め政策は多々あったが、その中には、後にアルトナで大々的に行われたことの予行演習のような内容も見受けられる。一種の宗教寛容政策である。

新規住民となる人たちの宗教・宗派を不問とし、彼らが望む通り、望む形での宗教儀礼の実践を認めるという触れ込みに誘われて、ルター派が支配的なドイツ北部のこの辺りではマイノリティとなりがちな、さまざまな宗教・宗派の信者たちがグリュックシュタットに押し寄せた。最初期の主要な住民となったのは、カトリック教国スペインの支配を逃れてきた南ネーデルラント地方の改革派教会系の(つまりルターではなくツヴィングリとカルヴァンの流れをくむ)プロテスタントと、1492年のスペインに始まる迫害を逃れてイベリア半島から(多くの場合オランダの各都市を経由して)やって来た、ポルトガル系ユダヤ教徒たち(セファルディム Sephardim)であったという。³¹⁾

このうち後者については、移住後の彼らの行動も、彼らが町の発展に果たした役割も、後のアルトナにおける事例と酷似している。政治・経済情勢の変化に応じて居住地や生業上の本拠地を機敏に変える必要に迫られていたセファルディムは、その多くが遠隔地と本拠地を結ぶ洋上・水上交易を得意とする商人であり、能力から見ても彼ら独自の遠隔交易ネットワークから見ても、デンマークが優先的に求めていた人材であった。町の発展に(言うまでもなく、この町が当時備

えていた交易地としての潜在力の限界内で)大きく貢献し、³²⁾やがてこの町で生を終えた彼らは、当地で取得したユダヤ教徒専用の墓地(1622年創設)に埋葬されることになった。このセファルディム系ユダヤ人創設の墓地が残っているという点も、グリュックシュタットと後のアルトナに共通する特徴である。³³⁾

このように、2つの町で実行された移民奨励政策の内容には、その結果もふくめて、明らかにある種の並行性が見いだされる。だとするとデンマークは、この1610年代のグリュックシュタットでの(政治・経済情勢の変化により中途半端に終わったとはいえ)成功体験を、約半世紀後のアルトナに移し替えて繰り返そうとしたのだろうか。

デンマーク側の動向だけに着目しているとそう見えないこともないし、筆者もこれまで漠然とそう思い込んできたのだが、実は必ずしもそうとは限らないことが分かる。理由は単純で、よく考えてみると時系列的な辻褄が合わないのである。

そもそもアルトナのユダヤ人墓地の方が、グリュックシュタットのそれよりも歴史が古く、前者の創設は1611年に遡る。³⁴⁾1611年といえば、グリュックシュタットの建設に5年ほど先立ち、さらに言えば、デンマーク王がアルトナを含むピンネベルク伯領を相続するよりも30年近く前である。つまりデンマーク王がアルトナに大幅なテコ入れを始める遥か以前から、今のアルトナとその周囲には、まとまった墓地を必要とする規模のユダヤ教徒たちが元々暮らしていたのである。

イベリア半島を脱出し、恐らくは間にいくつもの中間滞在地を挟みながら、はるばるエルベ川を遡ってこの一帯へたどり着いたセファルディムの第一の目的地は、当然ながら交易地として伝統と定評のあるハンブルクであったと思われる。ところが宗教改革の結果ルター派一色に染め上げられていた当時のハンブルクは、彼らにとってお世辞にも暮らしやすい場所ではなくなっていた。というか、そもそも暮らすこと自体を許可されない状態が長く続いた。たとえば1583年、12人の「ポルトガル人」が高額の供託金の支払いと引き換えに期限付き居住許可を求めてきた時、ハンブルク市議会はこれを門前払いしている。市議会側がようやく折れ、彼らの居住が条件付きで認められるようになったのは1612年のことだが、対象は市に高額な「保護料Schutzgeld」を支払う準備のある人たちに限定されていた。³⁵⁾したがって、これを支払えない人、もしくは支払いたくない人は、ハンブルク近郊のどこかに仮住まいを見つけ、商用がある時だけ市内へ通うという、大変不便な生活を余儀なくされたようである。

そうしたユダヤ教徒たちにとって、ハンブルクのすぐ西隣りのアルトナがそういう「どこか」の有力な候補地となったのは、ごく当然の結果と思われる。何とんでもアルトナはハンブルクに近い。アルトナの語源には諸説あるが、真偽はともかくよく知られた俗説の1つとして、低地ドイツ語の「あまりにも近いall to nah」に由来するという説さえ存在する。³⁶⁾

アルトナとその近郊に暮らし始めたセファルディムにとって、ことに深刻だったのは墓地の問題である。あえて大雑把な言い方をすると、キリスト教徒なら魂が抜けた後の肉体をそれほど重要視しない。これに伴い、肉体を埋葬する墓地も、少なくとも北ドイツの都市部では、現在でも利用権に期限が付いていることが少なくない。期限付きの墓地は期限が来ると掘り返され、中身を空っぽにして再び墓地として売り出されることになる。それまで埋葬されていた遺骨や遺灰は、ひとまとめにしてどこかへ片づけられることになるが、それで特に不満も出ないようである。³⁷⁾

ユダヤ教徒は、それでは困る。彼らの死生観の根本には「肉体を備えた復活への信仰der Glaube an die leibliche Auferstehung」が存するからである。これによると、魂と肉体は死をもって一時的に分離するけれども、復活の時再び結合することになっているため、死者の遺体はこの世の終わりまで大事に保管しておく必要がある。それゆえ、一度「使った」墓地を整理して再利用するな

ど、彼らにしてみれば論外の所業ということになる。一度死者を埋めたら、この世の終わりまでそこに埋めっぱなしにしておかなければならないのである。³⁸⁾

したがって、墓地にできる土地をただ単に借り受けるのではなく、どこかに恒久的に取得することが認められなければ、ユダヤ教徒たちがある場所に安定的に定住することはきわめて困難であった。³⁹⁾ 言い換えれば、1611年5月の末、3人のセファルディム商人にアルトナ郊外の土地の恒久的取得が許可されたことは、ユダヤ教徒たちからすればこの地に（政治的・経済的事情が許す限り）とどまって生業に従事する大きなインセンティブとなっただろうし、宗教的偏見よりも経済的利益を優先すべき領地経営者の側からすれば英断であったと言えるだろう。そしてもちろん、この英断を下した領主とは、まだピンネベルク伯領を相続していないデンマーク王ではなく、ピンネベルク伯領の前の領主一族、シャウエンブルク伯家の当時の当主エルンスト3世（1569-1622）であった。⁴⁰⁾

このように時系列を整理してみると、むしろ先ほどの第一印象とは反対に、グリュックシュタットでデンマークが行ったこと自体が、都市認定以前のアルトナでシャウエンブルク伯家の統治時代に既に行われていたことの焼き直しだった可能性が見えてくる。仮にこの想定が当たっているとすると、デンマークは「永代供養のできる墓地さえ融通してやればユダヤ人は集まってくる」ということを王領化する前のアルトナに学んでいたからこそ、グリュックシュタットに集まってきたユダヤ教徒たちに墓地のための土地取得をいち早く認め、アルトナを含むピンネベルク伯領が王領となった後も「歴代のシャウエンブルク伯たちが[アルトナの住民に]気前よく与えてきた商取引と信教の自由を、みなそのまま承認した」と考えられる。⁴¹⁾ だとすると、アルトナが宗教・宗派の異なる住民を概ね平和裏に共存させ、さらには近隣諸地域で迫害された自由思想家たちにさえ隠れ住むことを黙認する、実に懐の深い町となったことには、デンマークに領有される以前からの歴史的経緯が大きく関わっていたのである。

4. 交易都市アルトナの成立—紋章から読み取れる思惑と、その想定外の帰結

アルトナが、人間が寄り集まって住んでいる地域を意味するだけの「集落Siedlung」という扱いから、高度な自治権を与えられた国王直属の「都市Stadt」という扱いに格上げされたのは、ピンネベルク伯領一帯をデンマーク王家が継承してから四半世紀近くを経た、1664年8月23日のことである。隣国スウェーデンを相手に分の悪い戦いを続けていた時の王フレゼリク3世（在位1648-1670）は、傾いた国力を立て直すべく、対内的には1660年代に入って大貴族から特権を巧みに剥奪して彼らを政治的に無力化させ、急速な絶対王権の確立に努めていた。⁴²⁾ それと同時にこの王は、対外的には中小貴族および富裕市民層と結び、他の多くの当時のヨーロッパ諸国と同様、王権主導の重商主義政策による外貨獲得を図った。アルトナの都市認定およびそれに続くさまざまな形でインフラ整備および資本投下も、こうした1660年代のデンマークの政治経済上の基本戦略を踏まえて行われたと想定される。⁴³⁾

都市になりたてのアルトナが、というかその後ろ盾となるデンマーク政府が、出身地や宗教の違いに関わりなく商工業者の流入を歓迎しようとしていたことは、17世紀後半の古めかしいドイツ語で残っている次のような市制布告文からも明らかに読み取れる。

「あらゆる商売人、交易人、職人に対して、いかなる民族の出身であれ、われらの町アルテナー Altenahに、これより先何の妨げもなく暮らし、これまで行っていたのと同じ商いや手仕事をこ

れから先も自由に、ツンフトや役所[による管理]を導入することなく営み、かつ、自分たちの宗教を以前と同じように実践することをここに認めるものとする(…)]⁴⁴⁾

アルトナで取られたこうした宗教寛容政策の象徴として、しばしば引き合いに出されるのが、1664年の都市認定とほぼ同時に考案されたと思われるアルトナの紋章Stadtwapenである。現在に至るまでハンブルク・アルトナ地区の紋章としてほぼそのまま受け継がれているこの紋章には、中央部に広く開け放たれた町の門が描かれている。考案者は不明だが、この町の開放性を印象づけようとするデザイン上の意図は無理なく伝わってくる。⁴⁵⁾



図2 都市アルトナの紋章。
[Hinrichsen:1998] S.54 より転載

創設に遡るものであるにもかかわらず、セファルディムの墓域が占める割合は全面積の3分の1にも届かない。⁴⁸⁾ 残りの墓域は隣接地に後から創設され、やがて大幅な拡張を繰り返してセファルディムの墓域と融合するに至った、アシュケナズィム(ドイツ・東欧系ユダヤ教徒)の墓地である。アルトナに暮らすセファルディムの共同体は、アシュケナズィムのそれと比べて「常に小規模であり続け」、1770年代に入るまで自前のシナゴークさえ持たないほどであった。⁴⁹⁾

もちろん、セファルディムの母数自体が元々少なかったことも関係しているだろう。しかしそれ以上に重視しなければならないのは、デンマーク側の用意したさまざまなインセンティブによって都市アルトナに生まれた生活環境が、セファルディムよりもむしろアシュケナズィムをはるかに強く誘引する結果になったことである。一般にセファルディムより多様な生業に従事していたアシュケナズィムは、その少なからぬ構成員たちが前者と比べて経済的に脆弱であり、したがってまた潜在的な迫害の危険に対してもより脆弱であったと考えられている。⁵⁰⁾ ルター派の聖職者による反ユダヤ的な群衆扇動が、起きないわけではなかったにせよ「むしろ例外的事態」に属し、仮に起きても公権力によって速やかに鎮静化されていたアルトナは、そうした扇動が17世紀全般を通じて繰り返して起きていたハンブルクと比べて、彼らにとってははるかに安心して暮らせる町であった。⁵¹⁾ 生業上の利便性から危険を冒して(そして高額な「保護料」を支払って)ハン

ただしデザイン、特に商売っ気がからんだデザインというものは、どんなに工夫してもどこかに本音が透けて見えるものらしい。これまで不思議なくらい誰も指摘してこなかったが、開かれた門の前には波が描かれているのである。⁴⁶⁾ つまりこの門は、ただ無造作にあらゆる人を歓迎しているのではなく、とりわけ水路を通してやって来た・やって来る人たちを歓迎していることになる。「そうした人たち」とは、普通に考えればセファルディムに典型的に代表されるような、海路・水路を駆使した遠距離交易に長け、豊富な自己資本と自前の交易ネットワークを持ち合わせている商人のことだろう。そしてそれ以外の人たちは、受け入れるデンマークの側からすると、表向き来るなどとは言えないものの、その到来をもっとも狙っていた層からは多少なりとも外れた存在であったと思われる。⁴⁷⁾

こうしたデンマークの思惑は、都市認定後のアルトナで、少しずれた形で実を結ぶことになる。前節で紹介したアルトナのユダヤ人墓地は、セファルディムの

ブルクで暮らし続けるアシュケナズィムも依然としていたものの、居住地としてのアルトナと職場としてのハンブルクを往復する二重生活は、彼らにとって決して珍しい生き方ではなくなった。中にはハンブルクに合法的に居住もしくは出入りするのための方便として、セファルディムの交易商人たちの使い走りとなる者もあったという。⁵²⁾

おわりに

筆者が5年半の留学期間の大部分を、ハンブルク大学から（正確には、この大学の主に人文・社会科学系の学部・学科が集められた地区から）近い「塹壕通り」のアパートで過ごしたことは既に述べた。そこから南に15分ほど歩いた街路の一角には、かつてのハンブルクとアルトナの市境を示す舗石が今も埋め込まれている。



図3 アルトナとハンブルクの市境標石。1889年設置。筆者撮影

アルトナ近郊でそれなりに長く暮らした者としての個人的な印象だが、お膝元のドイツ語圏でアルトナというと、今ではボルノショップとロックの似合う猥雑で喧噪な地区というイメージが強い。これは恐らく、アルトナが一大歓楽街のレーパーバーン Reeperbahn を擁するからでもあるだろう。ドイツ語圏のロック音楽にも、アルトナゆかりの地名や店名が読み込まれた曲が少なからず存在する。⁵³⁾ それが正確にいつの頃かは特定できないが、デンマークが懸命に演出しようとした自由で開かれた町のイメージに、いつしか現実が追い付いていたのである。

本稿では、アルトナで行われた一種の宗教寛容政策はデンマークがゼロから始めたものではなく、実はそれ以前の、シャウエンブルク伯家が一带を支配していた時代からの施策にいわばうまく乗っかる形で展開されたのではないかという指摘を行った。そしてこうした政策がアルトナにもたらした結果は、デンマーク側の思惑とは多少なりともずれたものであったことも指摘した。

こうした点についてさらに子細を明らかにしていくには、初期近代よりさらに遡った中世後期の西洋史(縦)にも、またデンマークを中心とする初期近代の北欧史(横)にも、いわば縦横両軸で調査研究を拡大する必要があるだろう。しかし紙幅の都合ももちろんだが、新型コロナウイルス感染症の全世界的流行により、特に地域史や郷土史関連のデジタル化されていない現地資料へのアクセスが極めて困難となっている現状に鑑み、そうした作業には他日を期すこととせざるをえない。

また、これも本稿では紙幅の都合上詳説できないが、特に18世紀に入ってから目立つようになった自由思想家たちのアルトナへの流入についても、ユダヤ教徒たちの場合、ことにアシュケナズィムの場合と同様の事情を想定できると思われる。⁵⁴⁾ さまざまな理由からそれまで暮らしていた場所を追われた神聖ローマ帝国領内の学者や思想家たちが、しばしば避難先としてアルトナを選んだことは歴史的事実として確認できるが、アルトナの一体何が彼らを引き寄せたのかという直接の理由については、調べれば調べるほど謎が多く、はっきりしたことは現時点では分からない。確かにアルトナは信仰上の迫害こそ起きにくく制度設計されていたものの、だからといって思想・言論・表現の自由が幅広く保護された模範的な自由都市ではさらさらなく、新聞等の出版物には厳格な検閲がかけられていたし、時には出版業者の逮捕投獄、そして獄死といった事態も起きていたからである。⁵⁵⁾

言い換えれば、アルトナという町が自由思想家たちにとって、ユダヤ教徒たちに輪をかけて魅力的に映ったとは考えにくい。父祖伝来の宗教を迫害されずに奉じられればひとまず安心できたユダヤ教徒と異なり、自由思想家とは信仰箇条よりもむしろ自前の合理的・批判的思索に信頼を寄せ、これによって真実を明らかにしていこうとする人たちだからである。にもかかわらず、彼らがごぞつてアルトナを目指したとすると、その行動は先に見たアシュケナズィムの場合と同様、他のどの町でもそれ以上の危険や迫害にさらされかねないという、ある種の消極的で妥協的な熟慮の結果であった可能性が高い。

事の成り行き上、当然ながらこうした思想家たちは、しばしば経済的に非常に窮迫してアルトナに流れてきた。しかしアルトナの方でも、元々期待していた移住者層と違うからといって、つまり金も商売の能力も持たない連中だからといって露骨に追い返すことはできず、これもアシュケナズィムの場合と同様、ある種の妥協をもって彼らの移住を黙認したと思われる。筆者は以前、自由意志を隠れ蓑にして物事の原因究明を怠る態度を「無知の避難所 *Asylum ignorantiae*」と呼んで批判したスピノザの言葉遣いをもじり、17・18世紀のアルトナが果たした思想史上の役割を「自由の避難所 *Asylum libertatis*」と呼んだが、⁵⁶⁾ それはこのようにやって来る側と受け入れる側、双方の妥協点の複雑で微妙な均衡から生まれたのではないだろうか。

*本稿には、以下の競争的研究資金による研究成果が含まれる。

- ・東京国際大学特別研究助成(2020年度)
- ・日本学術振興会・科学研究費助成事業(科研費)基盤研究(C)「『共生空間』生成を巡る比較研究:ユダヤ教徒の複合アイデンティティを軸として」(課題番号:21K12435)

注

- 1) Vgl. [Gretzschel: 2016] S.115. アルトナのほか、ハーブルク Harburg, ヴィルヘルムスブルク Wilhelmsburg, ヴァンツバーク Wandsbek などの周辺の多くの都市や村落を飲み込んだこの時の大合併により、ハンブルクの人口は119万人から168万人へと一気に41%増加することになった (ibid. S. 151)。

- 2) Vgl. [Gretzschel: 2016] S.14.
- 3) Vgl. [Midorikawa: 2015] p.354.
- 4) 原題の les Séquestrés が複数形であることに加え、劇の内容に鑑みても「幽閉者たち」としたいところだが、これまで刊行された唯一の邦訳の題名に合わせておく。
- 5) アルトナの下町でナチスの突撃隊 (Sturmabteilung: SA) と市民が激しく衝突し、双方に18人の死者 (突撃隊員2名, 市民16名) を出したこの事件については, [Stahncke:2014] S.287-292を参照。
- 6) 1939年9月～1934年6月のベルリンにおけるサルトルの生活については, [Cohen-Solal:2015] 上巻p. 207-219を参照。これを読む限り, ベルリンでのサルトルの生活は (うんざりするほど活動的かつ自己顕示的だった後年の姿からは想像できないくらい) 地理的にも問題意識的にもきわめて狭い範囲で完結していたらしく, 近隣の町への宿泊を伴う旅行はもちろんのこと, 日帰りの小旅行すらほとんどしなかったと考えられる。サルトルが次にドイツの地を踏むのは第二次世界大戦後の1948年の講演旅行のことだが, この時にもハンブルク付近を訪れた形跡はない。
- 7) 多少のネタバレを承知で書いてしまうと, 『アルトナの幽閉者』は一種の親子心中で終わる劇なのだが, 親子が心中の舞台に選ぶ場所は作中ではトイフェルスブリュッケ Teufelsbrücke となっている (Vgl. [Sartre:1960] p. 372, 邦訳[Sartre:1961] p. 144-145.)。ここでサルトルは, 現地の土地勘がなかったことに起因するとしか考えられない, 二重の誤りを犯している。まず, ①アルトナに今も残る実在の地名はトイフェルスブリュック Teufelsbrück であり, 綴りが微妙に異なる。そこは些末な違いなので問わないとしても, さらに致命的なことに, ②サルトルは恐らく「橋 Brücke」という言葉への先入見から, 劇中ではこの場所を, 橋のたもとと交通量の多い事故多発地として描写している (Vgl. Ibid. p. 372-373, 邦訳p. 144-145.)。ところが実際のトイフェルスブリュックは, 橋は橋でも棧橋 Landungsbrücke なのである。筆者も何度か現地を訪れたことがあるが, そこは「悪魔の棧橋」という剣呑な地名とは裏腹に, 時折バスや船が発着するだけの長閑な渡船場で, どこをどう見ても自動車事故が多発するような場所ではない。ちなみに, アルトナに土地勘のあるドイツ人が読むとどうしても残るこうした違和感を和らげるためなのか, 『アルトナの幽閉者』の現行のドイツ語訳では, 親子が心中に選ぶ場所は固有名詞を削り, ただ「あの橋 die Brücke」とだけ訳出されている (Vgl. [Sartre:1987] S.156.)。
- 8) アルジェリアの独立運動を強権的に弾圧していた当時のフランス政府への批判を込めて, アルジェリアとアルトナをかけた, という説が発表当時まことしやかに語られていたようだが, これについては邦訳者の永戸多喜雄自身が, かなり早い段階で「いささか早計」という的確な評語とともに否定的に紹介している。永戸によれば, この作品にアルジェリア問題についての批判が込められているという指摘はサルトル自身の発言等から概ね正当と思われるが, この批判は最終的には「瞞着 (…) の支配する世界全体に向けられていると見なければならぬ」ものであり, アルトナ=アルジェリアの連想を強調するのは問題の矮小化につながる危険があるという (Vgl. [Nagato:1961] p. 106)。それ以前に, そもそもアルトナとアルジェリアでは最初の2文字Al-しか合っておらず, 職業作家がわざわざ考案した語呂合わせとして不出来すぎるように思われる。
- 9) 「自発的幽閉 (者)」という表現は [Cohen-Solal:2015] 下巻p. 790による。
- 10) もちろんこれは, 本稿がそうした先行研究に多くを負っていることと矛盾しない。ただし前者については, ここ数年のコロナ禍で現地での資料収集を行えていないため, 本稿では先行研究の蓄積を生かし切ることができないまま終わった。また後者の概説的研究については, 本稿でも度々参照される該博な通史 [Stahncke:2014] が大きな助けとなった。
- 11) Vgl. [Gretzschel: 2016] S.13.
- 12) Ibid. S.14.
- 13) Ibid. S.13.
- 14) ヴァイキングの活動が活発化した時代背景については, [Bohn:2010] S.8-10を参照。
- 15) Vgl. [Gretzschel: 2016] S.17.
- 16) 最終的な典拠は不明ながら, 文献中には例えば「デン人へのヴァイキング dänische Wikinger (Ibid.)」といった断定的な記述も散見される。
- 17) Vgl. [Bohn:2010] S.67-68.
- 18) これに先立ち, 1640年代にもデンマークとスウェーデンの間にハンブルクを巻き込んだ軍事衝突が起き

ていたはずだが、現時点では詳細を客観的に確認できる史料および研究文献を集め切れていないため、本稿では考察から除外する。

- 19) [Bohn:2010] S.68では1688年の出来事としているが、1686年の誤りである。この包囲戦については、ウィキペディアドイツ語版の項目「Belagerung Hamburgs (1686)」([https://de.wikipedia.org/wiki/Belagerung_Hamburgs_\(1686\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Belagerung_Hamburgs_(1686)))がさまざまな郷土史関連の史料や文献に散った情報を網羅的にまとめており、最も参照しやすい(2022年9月末日最終アクセス)。ただし原典となる北ドイツ郷土史関連の文献へのアクセスが非常に困難となっている現状、ここにまとめられている情報の最終的な信頼度については、判断を保留せざるをえないことを断っておく。なお、ウィキペディア日本語版の項目にも「1686年ハンブルク攻囲戦」([https://ja.wikipedia.org/wiki/ハンブルク攻囲戦_\(1686年\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/ハンブルク攻囲戦_(1686年)))が存在するが、こちらはアップデートがまだそれほど進行していない時点(2017年10月)のドイツ語版を全訳したものである。
- 20) Vgl. [Beckershaus:1997] S.220.
- 21) この一帯は19世紀半ばに起きた一連の戦争の結果プロイセン王国(のちドイツ帝国)に割譲され、第一次世界大戦後にシュレースヴィヒ地方の北半分Nordschleswigだけがデンマークに戻された。残った部分を合わせると、現・ドイツ連邦共和国のシュレースヴィヒ・ホルシュタイン州にはほぼ重なる。
- 22) Vgl. [Stahncke] S.61. この家系の歴代の当主の「名乗り」には、その時点での政治情勢や知行地に応じた細かな変異が見られるものの、これを逐一記述に反映させるのはあまりにも煩瑣なため、本稿ではシャウエンブルク伯に統一する。ちなみに、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン地方でオレンボー朝デンマーク王家が直接支配圏を行使できる地域は、分家に伴う知行地の分割が繰り返されたことにより、三十年戦争前にはそもそもこの地方全体の半分ほどに過ぎなかったという(Ibid.)。
- 23) Vgl. [Stahncke] S.62-65.
- 24) Vgl. [Gretzschel: 2016] S.61-62 und [Stahncke] S.61.
- 25) グリュックシュタットについても、コロナ禍で現地郷土史関連の文献をほとんど収集できていない関係上、ドイツ語版ウィキペディアの項目にまとめられた内容に負う所が大きいことを断っておく(<https://de.wikipedia.org/wiki/Glückstadt>)。
- 26) この町の名の由来については、建設当時のデンマーク王クリスティアン4世のものとしてされる次のような言葉が低地ドイツ語で伝わっているという。「うまくいくべきだし、うまくいかなければならぬ。それならこの町の名もグリュックシュタット(幸運の町・うまくいく町)とすべきであろうDat schall glücken und dat mutt glücken, und denn schall se ok Glückstadt heten!」(<https://de.wikipedia.org/wiki/Glückstadt>)。
- 27) Vgl. [Stahncke] S.65-66.
- 28) こうした一種の河川封鎖の結果生じた1630年9月の海戦は、ハンブルク側が数において優勢なデンマーク艦隊になすすべもなく引き下がった(Vgl. [Stahncke] S.66)とも、デンマーク側の軍艦4隻を鹵獲してグリュックシュタットの港の封鎖に成功した(Vgl. [Gretzschel: 2016] S.62)とも言われており、恐らくどちらかの記述に重大な誤りがあると思われるが、現地史料を確認できない現状では判別がつかないため、両説を併記するにとどめておく。
- 29) デンマークの零落を象徴するこの王の生涯と治世については、[Helms:2013] p. 162-172に簡潔にまとめられている。
- 30) Vgl. [Stahncke] S.66-67.
- 31) こどもドイツ語版ウィキペディア(<https://de.wikipedia.org/wiki/Glückstadt>)の記述に負う。なお、セファルディムの語源は、旧約聖書に一度だけ(『オバデア書』20)登場する地名「セファラドSepharad」とされる。現代ヘブライ語でセファラドはスペインを意味するが、ボツソンの以下の記述によると、元は違っていたらしい。「ラテン語訳聖書では、この名称は音の響きから『ボスポラス』に比定された。今日ではほぼ間違いなく、セファラドとは小アジアのリディアにあった都市サルデスSardes(現トルコ)のことだと分かっている。中世の聖書注釈者たちは、ほんやりとした音の類似から、セファラドと『スペイン』を同一視し、これがヘブライ語では一般的に定着した」(Vgl. [Bossong:2016] S.13.)。
- 32) ただし、こうしたセファルディムの活動が活発だったのは、あくまで本文でも述べたように「最初期」に限られる。その後の政治・経済情勢の推移から、町の将来性が地政学的に限られてしまったことを察

知した彼らは、「1730年までにそのほとんどが町を離れてしまい」、以後この町のユダヤ人人口の大部分はドイツ・東欧系の、特に遠隔交易を生業としないユダヤ人たち（アシュケナズィム Ashkenazim）で占められることになったという（http://www.alemannia-judaica.de/glueckstadt_friedhof.htm）（2022年8月23日最終アクセス）。

セファルディムに続いてアシュケナズィムについても付言しておく、その語源は『創世記』10,3に登場する人名「アシュケナズ Ashkenaz」に遡る。やはりボツソンによると、9世紀以降ゲルマン系の人々一般を指す言葉として用いられたが、のち「ゲルマン人の地に暮らすユダヤ人」を指すようになったとされる（Vgl. [Bossong:2016] S.13.）。

- 33) もっともグリュックシュタットのユダヤ人墓地は、アルトナのそれと異なり、ナチス時代に一旦全面撤去されてしまったのを戦後に復元したものだという（http://www.alemannia-judaica.de/glueckstadt_friedhof.htm）。恐らく、アルトナより小規模で容易に撤去できたことが仇となったのだろう。
- 34) この、ハンブルク・アルトナ地区に今も残る広大なユダヤ人墓地は、セファルディムによって創設された墓地としてはヨーロッパ北部で最古の歴史を持ち、現在同じセファルディム系のアムステルダム、スリナム（ジャワ島）、キュラソー島のユダヤ人墓地と共同で、ユネスコの「世界文化遺産」へのグループ登録を申請中という（Vgl. [Breitfeld:2011] S.2.）。
- 35) Vgl. [Hinrichsen:1998] S.54-55. 17世紀のハンブルクにおけるルター派聖職者集団と中小市民層の結託関係、および彼らに後押しされたハンブルク市議会の排他的かつ差別的な宗教政策については、[Weigl:1997] p. 89-98を参照。このハンブルク市政における市議会と市参事会（商業活動を活性化させるため、少なくともセファルディム系ユダヤ教徒やカルヴァン系プロテスタントの移住については、概ね前向きであったとされる）の対立は、第1節で見た1680年代のデンマークによる軍事介入の遠因となった。
- 36) アルトナ、もしくはこれに類する発音の名が文献に登場するのは1530年代のことだが、[Stahncke:2014] S.13-16の整理に従うなら、地名の由来は概ね以下の3説（うち①と③が広義の「あまりにも近い」説を採用）に分かれており、特に定説とされるものは存在しないようである（[Schütt:2014] S.12-14で物語風に紹介されている逸話の話運びおよび結論も、ほぼこれと変わらない）。①1536年、現地の川漁師が副業で始めた居酒屋を、ハンブルクの市境に「あまりにも近い（アル・ト・ナー all to nah）」ことからアルトナと名付け、それが集落の名として転用され定着した。②古いalt川辺の土地Au/Aueを意味するアルトナ（アルテナウ Altenau）という集落名がすでにあり、居酒屋の方がこの地名にあやかっただけ。③この地を視察に訪れたハンブルクの市参事会員が、ハンブルク市境に「あまりにも近い」こんな所で商売をされては困るとぼやき、これが居酒屋の名前、ひいては集落の名前として転用され定着した。
- 37) 一般に埋葬場所が不足しがちな、ヨーロッパの都市部におけるキリスト教徒の埋葬習慣については、特にドイツ語圏を念頭に置いた話ではないが、[Sashi:2019] p. 185-207に概要がまとめられている。
- 38) Vgl. [Studemund-Halévy/Zürn: 2010] S.13-14. 墓地や復活に対するユダヤ教徒の一般的な見解については、[Stemberger:2015] p. 192-199および[Brämer:2015] S.120-124を参照。
- 39) もちろん、人は土地の永久取得ができようとしてきまると次から次へ死んでいくから、この地に移ってきたユダヤ教徒たちも、当座はどこかに仮の埋葬地を工面して、そこに彼らの死者たちを暫定的に葬っていた。アルトナのユダヤ人墓地の初期の埋葬者たちの墓碑には、こうした仮の埋葬地から移されてきた経緯と日付が刻まれているものが少なくない（Vgl. [Studemund-Halévy/Zürn: 2010] S.15.）。また、こうした仮の埋葬地の調達さえおぼつかない場合、彼らはしばしば、遺体をきわめて遠くの墓地まで運ぶことを余儀なくされた（Vgl. [Freimark:2005] S.107.）。例えば、アムステルダムのユダヤ人街にセファルディム系移民の子として生まれた哲学者スピノザ（Benedictus (Baruch) de Spinoza: 1632-1677）の父方の祖父は、1627年に死んでアムステルダム郊外のユダヤ人墓地に埋葬されたが、その墓碑には「ナントからロッテルダムに来て、そこで死んだ」と記されている（Vgl. [Yoshida:2022] p. 30-31.）。つまり、わざわざロッテルダムからアムステルダムまで運んできて葬ったのである。
- 40) Vgl. [Studemund-Halévy/Zürn: 2010] S.15 u.a.
- 41) Vgl. [Stahncke:2015] S.67. もちろんデンマークが範としたのは、まだ都市とも呼べない集落止まりだった当時のアルトナではなく、たとえばアムステルダムのような、さらに大規模かつ有名なセファルディムの集住地であった可能性もある。しかしアムステルダム郊外のアウデルケルク Ouderkerkに今も残る

- ユダヤ人墓地（スピノザの一族（本人を除く）が埋葬されているのもここである）でさえ、創設は1614年5月末のことだから、アルトナのそれに丸3年遅れている (<https://www.bethhair.nl/>)。この3年という微妙な時間差から想像を膨らませるなら、もちろん証拠はないが、ハンブルクからほど近いアルトナに墓地が造成されたという情報をつかんだ（あるいはユダヤ人たち自身から情報を流された）アムステルダム当局が、セファルディムと彼らの商業資本にいわば「素通りされる」ことを嫌った結果、彼らに土地の取得および墓地の建設を許可する方向に舵を切った可能性も考えられる。
- 42) フレゼリク3世による、法制度上のギミックを巧みに利用した「疑似契約的クーデター *vertragsförmiger Staatsstreich*」とも称されるデンマーク絶対王制確立の経緯については、[Bohn:2010] S.69-77を参照。
 - 43) フレゼリク3世治下のアルトナに対する重商主義政策上のさまざまなてこ入れについては、[Stahncke:2014] S.68-72を参照。こうした振興策の結果、17世紀半ばからの約60年間に、アルトナの人口は3,000人から12,000人と約4倍になっている (Ibid. S.72.)。
 - 44) Vgl. [Hinrichsen:1998] S.53. 1896年にアルトナで刊行されたWichmann, Ernst Heinrich: *Geschichte Altonas*. 2. Auflage. S.69からの転載。なお「残っている」のはあくまで撮影された文面のみであり、原本は第二次大戦末期の空襲で文書庫ごと焼失している (Vgl. [Stahncke:2014] S.69.)。
 - 45) [Stahncke:2014]はアルトナの紋章がコペンハーゲンのそれに似せてデザインされた可能性を示唆している (S.68)。今回はWeb上で参照できる現代のコペンハーゲン市の紋章としか比較できなかったが、基本のデザインが水面に向けた城壁と3本の塔で構成されているなど、確かに何らかの影響関係を推測させる共通点が確認できる。
 - 46) 現行のアルトナ地区の紋章では、より古い時代のデザインと比べて、波模様はやや平坦になり目立たなくなっている。しかしこの部分が昔も今も変わらず水面を表しているという事実は、この部分の色が水色に塗られていることから十分に読み取れる。
 - 47) コペンハーゲンを含む神聖ローマ帝国外の（つまりシュレースヴィヒ・ホルシュタイン公領外の）デンマーク領でもっと露骨で、セファルディム以外のユダヤ教徒たちは17世紀末まで原則的に入国を認められておらず、どうしても入国したければ例外的な許可証を個人個人で取得する必要があった (Vgl. [Hinrichsen:1998] S.59.)。このことに鑑みても、できるならアルトナに人を選別的に集めたがっていたという、デンマーク側の思惑は明らかである。
 - 48) [Studemund-Halévy/Zürn: 2010]付録の墓域全図を元に計測した。
 - 49) Vgl. [Hinrichsen:1998] S.58.
 - 50) もちろんセファルディムが迫害に対して強靱な抵抗手段をもっていたという意味ではなく（もしそうなら、そもそも彼らのイベリア半島からの大脱出自体が起りえなかったろう）、あくまで相対比較の問題である。
 - 51) Vgl. [Hinrichsen:1998] S.57.
 - 52) ちなみに、単に書面上の雇用関係どまりのケースも、実際にメッセージの取次その他の雑用を引き受けるケースも両方あったという (Ibid.)。
 - 53) 例えばドイツ語ロックの開拓的存在として有名なウド・リンデンベルク (Udo Lindenberg: 1946-) は、初期のオリジナル曲の歌詞に、しばしばレーパーバーン界限に実在した店名や (Alles klar auf der Andrea Doria, 1973), アルトナの裏町育ちという設定の孤児の半生を織り込んだりしている (Rock'n Roller, 1976)。また、彼はビートルズのヒット曲「ペニー・レイン」(Penny Lane, 1967) をドイツ語でカバーしているが、ドイツ語版のタイトルは「レーパーバーン」に変更されており、歌詞の中にもアルトナ周辺の北ドイツの地名が読み込まれている (Reeperbahn, 1978)。
 - 54) アルトナに逃れた自由思想家たちに関する記述は、ムルゾー (Martin Mulso: 1959-) の一連の浩瀚な著作 ([Mulso:2012] [Mulso:2018]) のあちこちに散っており、そのまとまった形での紹介や検討は別の機会を待たねばならない。なお、これに関するムルゾー自身の一番簡潔にまとめた見解は、インタビュー形式の[Mulso:2017]で確認できる。ここで取り上げられた一連の思想家たちは、インタビューが途中で呆れ半分に「またアルトナですか Schon wieder Altona!」と口を挟むほど (Vgl. [Mulso:2017] S.55.)、まるで示し合わせたかのように皆アルトナへ逃げていく。
 - 55) 17・18世紀のアルトナにおける出版事情については、[Stahncke:2014] S.80-83に簡潔にまとめられている。
 - 56) Vgl. [Yoshida:2022] p. 375.

文献

- Beckershaus, Horst: *Die Hamburger Straßennamen. Woher sie kommen und was sie bedeuten*. Hamburg (Kabel), 1997. [Beckershaus:1997]
- Bohn, Robert: *Dänische Geschichte*. München (C.H.Beck), 2010. (2., aktualisierte Auflage) [Bohn:2010]
- Bossong, Georg: *Die Sepharden. Geschichte und Kultur der spanischen Juden*. München (C.H.Beck), 2016. (2. Auflage) [Bossong:2016]
- Brämer, Andreas: *Judentum. Die 101 wichtigsten Fragen*. München (C.H.Beck), 2015. (2., durchgesehene Auflage) [Brämer:2015]
- Breitfeld, Oliver et al.: *Archiv aus Stein. 400 Jahre Jüdischer Friedhof Altona*. Hamburg (Conference Point), 2011. (2. Auflage) [Breitfeld:2011]
- コーエン＝ソラル (石崎晴己訳) 『サルトル伝1905-1980』藤原書店, 2015年, 全2巻 [Cohen-Solal:2015]
- Freimark, Peter: *Jüdische Friedhöfe im Hamburger Raum*. In: Lorenz, Ina (Hrsg.): *Zerstörte Geschichte. Vierhundert Jahre Jüdisches Leben in Hamburg*. Hamburg (Landeszentrale für politische Bildung Hamburg), 2005. S.107-127.(Erstdruck 1981) [Freimark:2005]
- Gretzschel, Matthias: *Hamburg. Kleine Stadtgeschichte*. Regensburg (Friedrich Pustet), 2016 (3., überarbeitete und aktualisierte Auflage). [Gretzschel:2016]
- ヘルムス (村井・大溪訳) 『デンマーク国民をつくった歴史教科書』彩流社, 2013年 (原著1957年) [Helms:2013]
- Hinrichsen, Torkild: *Altona, die Juden und die anderen. Ein historischer Überblick*. In: Kaufmann, Gerhard (Hrsg.): *Schatten. Jüdische Kultur in Altona und Hamburg*. Hamburg (Dölling und Galitz), 1998. S.53-60. [Hinrichsen:1998]
- 翠川博之「サルトルの演劇理論—離見演劇」澤田直 (編) 『サルトル読本』法政大学出版局, 2015年, p. 342-356. [Midorikawa:2015]
- Mulsow, Martin: *Prekäres Wissen. Eine andere Ideengeschichte der Frühen Neuzeit*. Berlin (Suhrkamp), 2012. [Mulsow:2012]
- Mulsow, Martin: *Wichtig war die Suche. Ein Interview*. In: Salzwedel, Johannes (Hrsg.): *Die Aufklärung. Das Drama der Vernunft vom 18. Jahrhundert bis heute*. München (DVA), 2017. S. 49-57. [Mulsow:2017]
- Mulsow, Martin: *Radikale Frühaufklärung in Deutschland 1680-1720*. Göttingen (Wallstein), 2018. 2 Bde. [Mulsow:2018]
- 永戸多喜雄「実存主義の歩み—サルトル作『アルトナの幽閉者』をめぐって」『藝文研究』第11号, 1961年, p. 101-110. [Nagato:1961]
- Sartre, Jean-Paul: *Les Séquestrés d'Altona*. Paris (Gallimard), 1960. [Sartre:1960]
- サルトル (永戸多喜雄訳) 『アルトナの幽閉者』人文書院, 1961年 [Sartre:1961]
- Sartre, Jean-Paul: *Die Eingeschlossenen von Altona. Stück in fünf Akten*. Reinbek (Rowohlt), 1987 (Neuübersetzung von Traugott König). [Sartre:1987]
- 指昭博『キリスト教と死』中公新書, 2019年 [Sashi:2019]
- Schütt, Ernst Christian: *Altonaer Geschichte(n)*. Bremen (Edition Temmen), 2014. [Schütt:2014]
- Stahncke, Holmar: *Altona. Geschichte einer Stadt*. Hamburg (Ellert & Richter), 2014. [Stahncke:2014]
- シュテンベルガー (ルスターホルツ・野口訳) 『ユダヤ教 歴史・信仰・文化』教文館, 2015年 (原著1995年) [Stemberger:2015]
- Studmund-Halévy, Michael und Zürn, Gaby: *Zerstört die Erinnerung nicht. Der jüdische Friedhof Königstrasse in Hamburg*. Hamburg (Dölling und Galitz), 2010. (3. Auflage) [Studmund-Halévy/Zürn:2010]
- ヴァイグル (三島憲一・宮田敦子訳) 『啓蒙の都市周遊』岩波書店, 1997年 (原著1997年) [Weigl:1997]
- 吉田量彦『スピノザ—人間の自由の哲学』講談社現代新書, 2022年 [Yoshida:2022]